

## 7 山王廃寺の掘立柱建物の復元

田 中 広 明

山王廃寺の前身建物群、北方建物等について、従来の報告を踏まえ建物の復元を試みたい。

### (1) 北方建物（5次建物1）

北方建物は、高麗尺が適合する九間三面の側柱建物で、東から桁行き3間に束柱列、または間仕切りがあったとされる(図①)。身舎の柱間は、7尺等間、梁行きは6尺等間であり、廂は、三面とも5尺である。この建物の南面廂柱筋には石列があり、その中央に円筒埴輪を転用した排水管が埋設されていた。

桁行きの柱列が、身舎の隅柱を結んだ線と一致する。桁の上に梁をのせ、その上に梁を組む京呂組みと考えられる。一方、廂の柱は、身舎の柱列から外れるため、身舎柱から廂柱に梁を掛け、梁の上に桁を乗せた折置組みとなる。また、北面廂には、廂柱の中間に柱がある。柱の付け替えか、補助柱穴と考えたい。

さらに、東3間の柱列と同じ柱列が、西3間にもあったとすると、桁行き3間の三室造りとなる。廂柱のP21が、桁行き柱列から外れるのは、中央室に付く廂の出が左右より深いと考えれば、ここに扉を想定できる。法隆寺伝法堂では、三戸の扉が取り付く。身舎は、床張りの建物ならば、梁間方向に大引きを渡し、大引きに根太をかけ、床板を張ったと考えたい。廂は幅が狭く、軒支え、または縁と考えたい。

ところで、石列や暗渠排水は、廂柱列を跨ぐ。軒の出が4尺ならば、排水列は屋内となる。排水施設は、建物の裏側に設置するはずである。しかも、南面廂の柱列も河原石敷きの下では、確認されていない。そこで、この排水施設は、この建物と直接かかわらない時期の施設と考えておきたい。

なお、当建物の西には、2条の側溝で挟まれた道路跡がある。この道路は、山王廃寺の中軸線と一致する。当建物の廂が、西面のみであることも建物の西側から動線が延びていた証拠である。

以上の条件に基づき、床は板張り、屋根は板葺き、壁は板壁と仮定して復元したのが、図③である。

### (2) 北方建物前身建物（5次建物6）

北方建物と重複する2間×3間の総柱建物とされる建物である。柱列の並びが不自然である。そこで、P<sub>7</sub>をひとまず置き、①P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が直線、②P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の中間、③P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>列とP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>列は平行だが、P<sub>4</sub>が外れるなどの条件を踏まえると、図①のような八角形総柱建物を想定できる。

柱穴の規模、深さがほぼ等しく、総束柱の建物と考えられる。おそらく、束柱の上に頭貫でつなぎ、その上に台輪をめぐらし、中央のP<sub>5</sub>からP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>、またP<sub>6</sub>からP<sub>1</sub>に梁をわたすか、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>を通る大引きを側柱上の台輪に掛け、その上に根太を置き、床を張ったと考えたい。壁は、『上野国交替実録帳』『佐位郡』条の「八面甲倉」を参考にすると、壁は板壁（甲張り）だったと考え、図④のような建物を復元した。

八角形の倉庫は、伊勢崎市三軒屋遺跡、熊本県鞠智城跡、愛媛県市道遺跡などがある。古くは前期難波宮跡、法隆寺夢殿、栄山寺八角堂、京都府極原廃寺などに八角形の仏堂や仏塔がみられる。

### 40号トレンチ前身建物

建物11は、桁行3間×梁行3間の総柱建物である(図②)。ただし屋内の束柱は、2本だけで梁行の柱列と一致しない。そこで、側柱列に頭貫、台輪を回し、そこに屋内の二本の束柱に乗せた大引きを台輪に渡し、大引きに根太を掛けて床を張ったと考えた。床板の方向は、桁行き方向となる。

台輪の上には、柱を立てて壁板を落し込んだか、丸木や角材を校倉に組んだと考えられる(図⑤)。いずれにせよ、この建物の屋内に柱は無く、側柱、または校倉壁に桁や梁をのせて小屋組みとした。この建物は、5次建物2、3に匹敵する床面積であり、棟行き方向も一致する前進建物の一棟であり、その東端にあたる。同様の側柱列と屋内柱が一致しない建物は、ほかに3次建物9がある。

以上から、校倉壁、板葺きの高床倉庫を復元した。この倉庫は、出挙稲を収納した穎倉と考えられる。

#### まとめ

前身建物群には、2時期の変遷がある。ここで検討した2棟は、5次建物2、建物3と柱筋が一致し、一連の配置規範で設置された倉庫建物である。この建物を評家や評家の前身となった屯倉の倉庫ならば、一斉に倉庫を設置したのではなく、満倉を契機に増設し続けたと考えられる。

いっぽう、豪族居宅や古代寺院の倉庫は、出挙を前提とした穎倉と考えられており、一般に2×2間、または、2×3間の倉庫に止まる。山王廃寺が、上毛野氏にかかわる寺であっても、一寺院に私富を集積したとは考えられず、各地に設置した宅や田荘の倉庫に備蓄したと考えられる。むしろ、大形の倉庫は、国家の権威を象徴する評家か、いわゆる東国国司（総領）の駐留した王権の直営地（屯倉）と考えられる。

また、従来、食堂か僧坊と考えられていた建物は、三間三室の法隆寺伝法堂と類似点が指摘でき、居住性の高い建物が、倉庫群の移転後、山王廃寺の中軸線に沿って建てられたと考えられる。

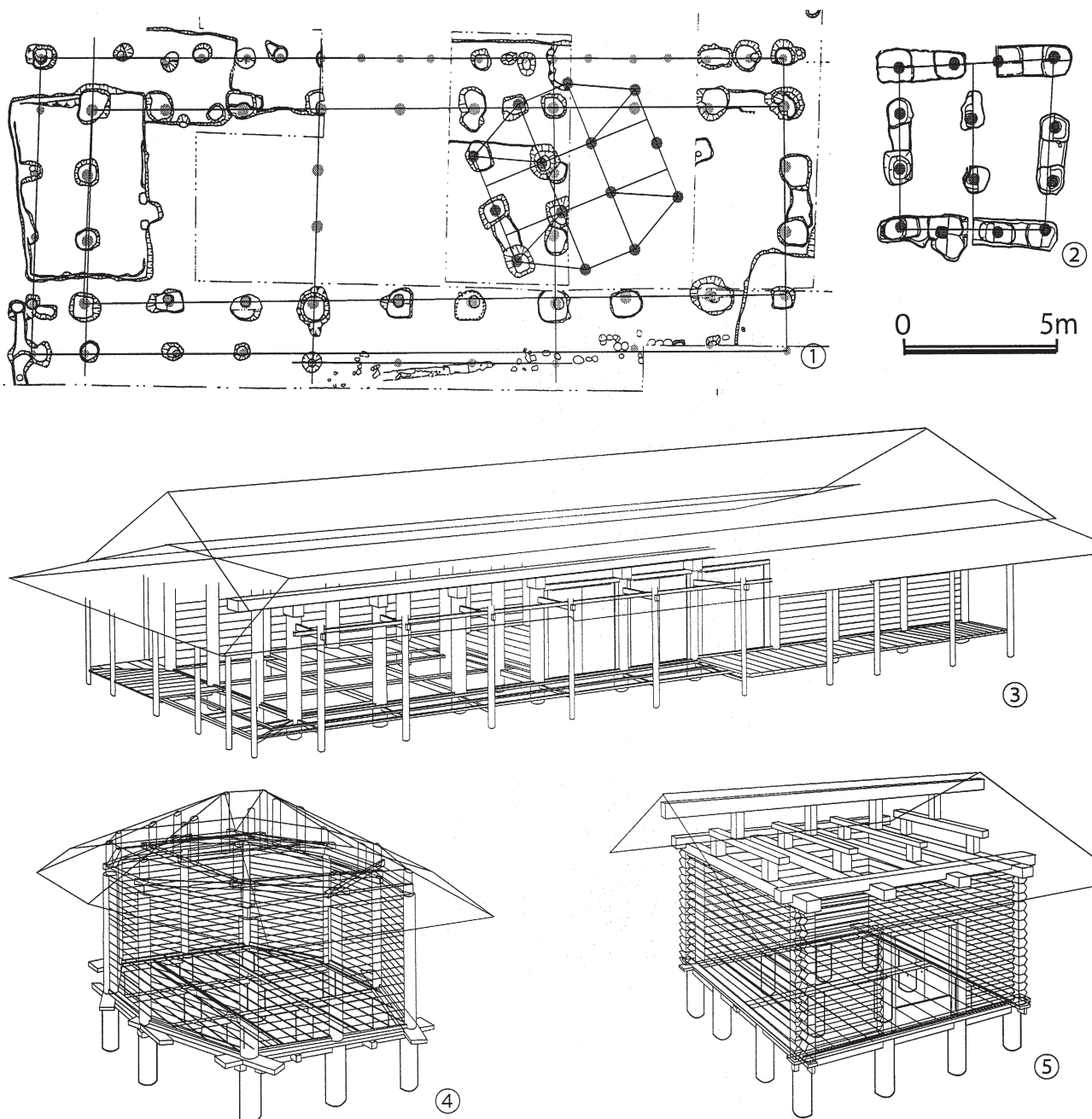


Fig.63 九間三面屋・八角倉・三間倉の復元